

八〇周年記念論文集によせて

経済学部長 小 檜 山 政 克

わたくしは、ときどき、町はずれの粗末なスーパーマーケットに寄って、生活に疲れた顔をしたおかみさんたちが、つきつめた表情で、すこしでも安い品物を買つけようと、必死になって商品をえりわけている姿をみるのを好む。そしてそこで、自分のために安い靴下でもみつけようものなら、最高の気分になる。そこには、大学の構内などではあまりふれることのできない、庶民の生活のにおいが、ただよっている。かの有名なイギリスの経済学者アルフレッド・マーシャルが、ひまあるごとに、ロンドンの貧乏人の町イースト・エンドを訪れたという話は、およそ経済学を学ぶ者なら誰でも知っていることだろうが、われわれが経済学部で学び研究している経済学というものは、まさにこのスーパーマーケットの主婦たちが苦労している問題を扱っているわけである。わたくしは、主として、本誌の読者のなかの本学経済学部の学生諸君に対して、このことを語っているのであるが、この問題、つまり、なんでもが値上がりしていくなかで、乏しい収入をもとに、どのようにして夫や子供にたべさせ、着せていくかという主婦たちの苦労を抜きにしては、経済学は語れないのである。もちろん、こういったからといって、賃金や物価の数字ばかり扱うのが経済学というのではない。主婦たちの悩みをほんとうに解決するためには、剰余価値の法則も、再生産表式も、有効需要論も、乗数理論も、研究しなければならないだろう。

しかし、彼女たちの苦勞を忘れてしまったところでは、どんなみごとな論理も数式も、それはもう経済学ではないのである。

本号は、立命館大学の創立八〇周年を記念して発行される。何百年という伝統をもつヨーロッパの大学は別として、わが国の大学としては、八〇年というのは、相当の重みをもつ歳月である。この長い年月にわたって庶民の大学としての伝統を築いてきた先人たちに対して、いまのわれわれは、経済学部としての自分たちの持場で、庶民の生活と結びついた経済学を学び研究し、つくりあげていくことによって、その伝統にこたえるべきだろう。

八〇年というのは、先人たちの辛苦の蓄積の年月であったが、一九八〇年代というのは、新しいわれわれが活躍すべき未来の年月である。しかしそれは決してばら色ではない。高度成長期を終えて新しい困難な段階に入ろうとしている日本資本主義、無定見といわざるをえないような政治・経済・外交政策をとり続ける大統領のもとで混迷する米国経済、かつてはますますにも人類の輝かしい未来を実現するかと思われていた社会主義諸国における経済の停滞と展望の欠如——世界中どこをとってみても今日ほど真の経済学による解決を必要としている諸問題がひしめいている時代はないであろう。そして、われわれ立命館大学経済学部の教員、学生が力をあわせて真剣に努力すれば、経済学の前進とこのような課題の解決に、われわれなりの貢献をはたすことができるだろうと考えるのは、あながち根拠のないことではあるまい。

八〇年をめぐりとして、本誌がいつそう前進、飛躍することを、期待するものである。

一九八一年十二月